

家族の はなし



きたゆきこ

ママとパパと浩樹

台所に立つ母を水道栓越しに上目遣いで眺めていた浩樹は、大きくクリクリした目をパチパチさせて、何度か合図を送ってみた。しかし、まるでそこから微動だにすれば奈落の底に落ちてしまうかのごとく、母は身動きも瞬きもしなかった。ただひたすらに一点を見つめていた。

浩樹は思い切り背伸びをしてシンクの中を覗いたが、真ん中にぽっかり開いている排水溝以外、特に目を惹くようなものは見当たらず、再び母へ視線を戻した。

「ママあ。」

試しに声を掛けてみたが、やはり状況は変わらない。

「マ・ア・マ！」

もしかしたら聞こえなかったのかと思い、幼稚園の先生に、いつも元気があって宜しいと褒められる挨拶のときのように、再び母を呼んでみた。すると、母がほんの少しだけ目線を上げて、ほんの少しだけ口元に笑みを浮かべたのを、小さな浩樹は見逃さなかった。

今までなかなか解けなかった算数の計算を解いたときのような、何かをやり遂げた淡い達成感を胸に抱き、勢い良く振り返り、ソファに座る人物に溢れんばかりの笑顔を見せた。

「パパ！今ね、ママが笑ったよ！僕が笑わせたんだよ！ねえ、パパあー。」

しかし、父は浩樹の声に反応することなく、テレビ画面から目を離さなかった。その場でしばらく身動きしない父を眺めていたが、痺れを切らしたように駆け寄り、父の隣にちょこんと腰掛けた。両足をプラプラさせながら、隣に佇む父の顔を見上げて見たが、浩樹が隣に座ったことにすら気がついていないように見えた。ソファの前に陣取るテレビの画面に目を移し、浩樹はすぐに父に話しかけた。

「ねえねえ、パパ。パパいつもお昼はこれじゃないの見てるのに、どうして今日はニュース見るの？」

テレビから流れるアナウンサーの話や言葉は、浩樹には難しすぎて何を言っているか分からなかったが、画面に映し出された映像から、車がどこかにぶつかってしまったのだろうということだけは分かった。

「車、壊れちゃってるね・・・」

パパと浩樹

様子を伺うように再び父の顔を見上げたが、やはり視線はテレビに釘付けのようだった。浩樹は小さな頬をぷくっと膨らませてみたが、どうやらこれも効果が無いようだと思し、ソファにごろんと寝転がった。丁度頭が父の膝に乗り、その気持ちよさにウトウトと瞼が落ち始めた。

「寝るのか？」

落ちかけていた瞼を何とか引っ張り上げ、父の顔を見上げてみたが、視線は相変わらずテレビに釘付けだった。視線を移して台所を見てみると、いつの間にか母の姿が無くなっていた。

「あれ・・・？ママ、どこに行ったの？」

膝の上から見上げる父の顔は、大好きな父の顔ではないような気がした浩樹は、片手を伸ばして父の脇腹を2・3回くすぐった。

「お、おいおい！何するんだよ・・・」

「僕、こっちのパパの方が好き！」

大好きな父の膝の上で守られることが嬉しくてたまらないと言った表情の浩樹を見て、父もようやく笑顔になった。

「なあ、浩樹。パパ、どんな顔してた？」

優しく頭を撫でる大きな手にうっとり目を閉じていた浩樹は、パチッと大きな目を開いて、少し悩むようにあごに手をやった。その背伸びをした仕草に、父は声を上げて笑った。

「えっとねえ、なんかね、う～ん・・・」

「なんだよ。もったいぶらないで教えろよ。」

「えっとお～・・・」

ニヤニヤし出した浩樹を見て、父は膝の上でのんびりと考えに耽るふりをしている息子の両脇をお返しとばかりにくすぐった。キャツキャツキャツキャとはしゃいで父の膝の上を転げ回る浩樹を、上手く腕の中でコントロールしながらくすぐりまくった。

悲しいパパと浩樹

「やめて～！言うから～言う言う！」

「よし。では話してみよ。」

涙を拭って息を整えつつ、浩樹はソファに座り直した。

「泣きそうだったよ。」

再び足をプラプラさせた浩樹は、次第にそれが天職でもあるかのように、熱中し始めた。そのため、隣に座る父の顔から表情が消えた事に、全く気がつかなかった。

「ねえ、パパ何か悲しい事があったの？」

「・・・・・・・・。」

「ねえ、パ・ア・パ！」

先ほど母の気を惹く事に成功した方法を再度試した浩樹は、それが功を奏したことを確認し、笑顔で再度聞いてみた。

「パパ、何か悲しい事があったの？」

「・・・うん？どうして、そう思うんだ？」

ちょっと得意気にあごを上げ、ふんふんと鼻息荒く浩樹は答えた。

「だってね、この前、舞ちゃんがおんなじような顔してたんだもん。舞ちゃんね、おうちのワンちゃんがね、死んじゃったんだって。それでね、舞ちゃん、悲しかったんだって。僕が舞ちゃんにね、何か悲しい事あったの？って聞いたらね、舞ちゃん、びっくりしてたんだよ！何で分かったの？って。」

そんな我が子の頭を優しく撫でる父の表情は、今まで浩樹が見たことのない、何とも説明のつかないものだった。先ほどまでの得意満面の表情が消え、急に不安の雲が浩樹の幼い心に、そして顔に広がった。

パパの涙と浩樹

「パパ・・・僕、いけないこと、したの？」

そんな息子の様子に気付き、父は慌てて笑顔を作った。

「いや、違うよ。浩樹は何も悪くない。浩樹は全く悪くないよ・・・悪いのは・・・」

そこまで言うと、父は声を押し殺して泣き始めた。静かに肩を震わせる父の姿を見て、浩樹は動揺することなく、ソファの上に立ち上がって父の頭をぎゅっと抱きしめた。

「パパ、大丈夫大丈夫。きっとすぐに、お仕事見つかるよ。悪いのはパパじゃなくて、しゃかいが悪いんだよ。ね？パパ。」

たぶん自分の言っていることの半分も理解していないのだろうが、母の真似なのだろう、優しく慰めてくれる息子の背中に手を回し、小さく暖かく、まだ六年ほどしか生きていない強い命の鼓動に耳を傾けた。

しかし、その息子の鼓動が益々父に自分のしたことの業の重さと罪深さを思い知らせてくる。涙は止まることなく、後から後から溢れ出てくる。

「パパ、良い子良い子。」

どれくらい経っただろうか、気がついたら小さな紅葉のような手が、自分の髪の上を行き来する感触に心地よく身を委ねていた。その手が急に止まったため、頭を上げてみた。

「ママ！どこ行ってたの？お出かけしてたの？」

息子の体をゆっくり離し、その視線の先に目をやる。そして、再び浩樹の目を見やって言った。

「浩樹・・・ママが、見えるのか・・・？」

父の声に振り返った浩樹は、その言葉の意味が分からないと言ったように、小首をちょこんと傾げた。

「パパ、見えないの？」

帰ってきたママと浩樹

そんな息子の姿に胸が締め付けられ、何をどう答えればいいのか分からなくなった父は、結果、無言を続けた。

ソファから飛び降りた浩樹は、リビングのドアの前まで駆けて行き、何かを見上げるように立ち止まった。両手を後ろで握り合わせ、何も言わずに体を左右にゆらゆらと揺らしている。その姿はまるで、無言で何かを訴える、風に揺られるひまわりのようなようだった。

ソファから離れられない父は、静かにその後ろ姿を見守っていた。声を掛けたいが、どうしても声が出なかった。

「パパ、ママがね、もう行かなくちゃって。」

くるりと振り向いた浩樹は、無邪気な笑顔でそう言った。

「・・・ママが、そう、言ったのか？」

父が息子に向かって掛けられる声は、それがやっとなかった。

「うん。ねえ、ママどこに行くの？」

お出かけだと思っているようで、息子の顔からは冒険を前にした興奮のようなものが伝わってきた。そうではないことを知っている父は、母の行き先について本当のことを話すべきなのかどうか、大いに迷った。

「そうだ！ねえ、パパと僕も一緒に行こうよ！」

世紀の大発見をしたかのように大袈裟に手を打ち、満面の笑みでソファまで駆け戻ってきた息子に、父は何も答えることができなかった。

「浩樹・・・」

「ね？そうしようよ！みんな一緒の方が楽しいもん。僕、お腹空いたって言わないし、おもちゃ欲しいって言わないし、疲れたって言わないよ。ねえ、パパ、行こうよ。ね？ね？」

普段から我儘を言わない息子の、有無を言わさないような言葉に必死さを感じ取った父は、この小さな子供は、もしかしたら全てを知っているのではないかと思った。

行けないパパと行きたい浩樹

そう思った途端、父の額には脂汗が浮き出し、呼吸は速くなり、知らずに拳から血が滲むほど強く握り締めていた。

「パパ・・・駄目？・・・怒ってるの？」

目の前に佇む息子の目に、薄っすらと涙が浮かんでいた。もうこれ以上、隠し通すことはできないことを悟った父は、大きく何度か深呼吸をし、ゆっくりと口を開いた。

「浩樹。よく、聞いてくれ。あのな、ママが行くところには、お前とパパは、行けないんだよ・・・」

息子は、勢いで取れるのではと思うほど首を激しく左右に振り、父の言葉を頭から叩きだした。

「違うよ！ママは、一緒に行けるって、言ってるもん。まだ間に合うって・・・！」

頬を伝う息子の涙を指ですくい、大きくクリクリした目を真っ直ぐに見た。

「浩樹、駄目なんだ・・・一緒には、行けないんだ・・・」

「でも・・・ママが・・・」

自分の涙を拭うこともせず、しゃっくりあげる息子を強く抱きしめた。

「ごめんな、ごめんな、浩樹・・・全部、パパが、パパが、悪いんだ・・・本当に、ごめん・・・」

父の大きな背中に回そうとする息子の手は、肩甲骨まで届くので精一杯だったが、しっかりと父の体を抱きしめていた。

「パパが、悪いんじゃないよ・・・」

息子の声が父の胸を抉り、大きな痛みを走らせた。

「いいや・・・パパが、弱かったんだ・・・」

小さい肩を父の涙がすっかり濡らしてしまった頃、浩樹がポツリと呟いた。

ママに会いに

「パパ・・・ママが、会いに来てって、言ってたよ・・・」

息子の両肩を掴んでゆっくりと体を離した。顔を見合わせた親子は互いに静かに頷いた。

真っ白な長細い箱のような廊下の両側には、いくつものドアが並んでいる。浩樹は思わず父の手を強く握った。

「大丈夫だよ。怖くないからな。」

息子の心情を察した父は、息子の手を優しく握り返した。

「では、参りましょうか。」

白衣の人間の後ろをついて、ひたひたと静かな廊下を歩いていくと、見慣れた名前の書かれたプレートが掛かっているドアの前に差し掛かった。

「こちらです。どうぞ・・・」

白衣の人間がゆっくりと引き戸を開けると、部屋の真ん中に置かれたベッドの上で横になる人影が見えた。

「パパ・・・」

大きな目に不安の雲を広げた浩樹が、思わず父の手を引っ張った。

「大丈夫・・・ママに会いたいだろ？」

小声で諭し、小さな手を引くようにして部屋に入った。それでも幼い浩樹は何かを感じ取っているかのように、腰が引けてしまい、思うように足が前に進まなかった。

ベッドのママと浩樹

「ほら、ママだよ。」

すっかり父の後ろに隠れる格好になっていた浩樹は、はにかむ子供のように父の後ろから少しだけ顔を出した。途端に、その顔はパッと晴れ渡った。

「ママ！」

そう言ったかと思うと、父の背後から飛び出して、ベッドの上の人影に飛びついた。

「こらこら、ママは怪我してるんだよ。そんなにしちゃ駄目だ。」

慌てて止めに入った父に体を後ろに引っ張られながらも、そんなことはどこ吹く風といった様子で、浩樹は夢中で母に話しかけた。

「ママ、言ったとおりにパパと一緒に来たよ！僕、良い子でしょ？ねえ、ママ、お家に帰ってくる？一緒に帰れる？」

それまで静かに横たわっていた母の目が、ゆっくりと開くのを見た浩樹は、父が抑えるのが困難なほどの力を発揮して、何とかベッドの脇に肘をついた。

「ママ、僕、来たよ。パパも一緒だよ。ほら。」

浩樹は肩に置かれた父の手を引っ張り、まるで見せびらかすように母に披露した。母は、いつもの穏やかで優しい笑顔を浮かべ、そんな息子を頼もしそうに見守った。そして、ゆっくりと視線を動かした。

「あなた・・・良かった・・・何ともない？」

「・・・・・・・・。」

「私、とても心配していたの・・・お医者様にも、何度もお願いしたのよ、あなた達に会わせてくださいって・・・」

「うん・・・」

「ねえねえ、一緒にお家帰れる？」

謝るパパとママと浩樹

二人の顔を見比べながら、浩樹は嬉しそうに聞いてきた。

「そうね・・・ママがもう少し元気になったら、一緒に帰りましょうね・・・」

「ホント？あとどれくらい？」

前のめりになって夢中で聞いてくる息子の様子を、母は笑いながら見つめている。そして、そんな二人を沈痛な面持ちで、父は見守った。

「二人とも、ごめんな・・・」

急な父の謝罪の言葉に、母と息子は顔を見合わせた。

「パパ、どうしたの？一緒に帰れるの、嬉しくないの・・・？」

「そうじゃない、そうじゃないよ・・・パパも、一緒に帰りたい・・・でも・・・」

「あなた、心配しないで・・・私またすぐ働けるようになるわ。怪我也、そんなにひどくないもの・・・また、三人で一緒に暮らせるわ・・・」

その言葉に、父は溜まらず崩れ落ちた。

「パパ・・・？どうしたの？どこか痛いの？」

「あ、あなた？大丈夫？」

優しく頭を撫でる息子の手を両手で掴み、そのまま片手を伸ばして息子の体を抱きかかえると、もう片方の手で妻の頭を抱えるようにして抱きしめた。

「ごめんな・・・ごめんな・・・本当に、ごめん・・・」

そんな家族の様子を白衣の人物は静かに見守っていたが、ふとドアの外から部屋を覗かれている気配に気が付き、振り向いた。入院着を着た一人の子供が、ドアの隙間から中を覗いている。

「まあ、夢を見たとでも思われるだろう。心配ないか。」

離れていくママと浩樹

白衣の人物はぼつりと眩き、三人の方に向き直り、事の成り行きを見守った。

「あなた、どうしたの？何かあったの？」

妻の問いに答えることができないほど、後から後から涙が溢れ、喉が詰まって声が出なかった。

「パパ、良い子良い子。」

自分が一番慰められる方法を、息子は一生懸命父に施し続けた。

「一緒に・・・お前たちと、一緒に、いれば・・・それだけで良かった、はずなのに・・・俺、俺、もう、どうしていいか、分からなく、なって・・・もう、未来が全然見えなく、なって・・・」

「大丈夫よ、あなた・・・三人でいれば、何があったって乗り越えられるわ・・・それが、家族である意味でしょう？」

「・・・そうだ・・・そうなのに、俺・・・這いつくばって、でも、泥水、飲んで、でも・・・一緒に、いられるように、頑張れる、道があった、はず、なのに・・・俺、見えなくて・・・」

白衣の人物が再びドアを振り返ると、先ほど部屋を覗いていた子供の姿は無くなっていた。それを確認した白衣の人物は、一歩前に進み出た。

「大変申し訳ないが、もう時間がない。」

その言葉に全身を震わせた父は、二人を抱きかかえたまま、ゆっくりと振り向いた。何かを懇願するようなその目に向けて、白衣の人物はゆっくりと首を左右に振った。

父は、諦めたように小さく頷き、二人を抱きしめる腕を緩めた。

「浩樹、もう、行かなくちゃいけない・・・」

父の腕の力が緩まってからも、浩樹はそこから動かなかった。

「もう？ママは？一緒に行かないの？」

再び息子を強く抱きしめ、何度も小声で謝った。

離れていくパパと浩樹

「あなた・・・もう少し、浩樹と二人で、待っててくださいね。私、すぐに帰りますから・・・」

付き合う前から好きだった、妻の笑顔の額に軽く口付けをして、息子を抱えて立ち上がった。

「ごめんな・・・本当に、ごめん・・・」

すでに静かな寝息を立てている妻を、止まらない涙を拭いもせずに見つめる父の背中から、白衣の人物が声を掛けた。

「では、行きましょうか。」

父は息子を抱きかかえたまま、ゆっくりと出口に向かって歩き出した。

「あ・・・申し訳ないが・・・」

白衣の人物は父を制して目配せをした。父は悲痛な面持ちで、腕に抱いた息子を床に下ろした。

「パパ？」

只ならぬ父の様子に気がついた息子は、離れないようにと両手で父の手を握り締めた。

「浩樹・・・本当に、本当にごめんな・・・パパ、浩樹と一緒にには、行けないんだ・・・」

「どうして？どうしてなの？一緒に帰らないの？」

息子の目には、みるみる大粒の涙が溜まり始めた。そんな息子の姿が、父の胸を大きく抉り、その痛みにもこれからも耐えていかなければいけないのが、自分の犯した罪への罰なのだと、父は思い知った。

「坊や、お父さんは君とは一緒に行けないんだよ。子殺しの罪は、とても深いのだからね。」

「こごろしって何？なんで？なんで、パパと一緒に、行けないの？」

浩樹は涙ながらに白衣の人物に詰め寄ったが、そのままその腕に抱きかかえられてしまった。

行ってしまったパパと浩樹

「やだ！僕、パパと居る！一緒にママを待つんだよ！」

「坊や、君が行くところはとても素敵なところだ。お友達もたくさんいる。お母さんのことも、ずっと見守っていけるんだよ。」

「・・・じゃあ、パパは？パパは、どこに行くの？」

「お父さんはね、自分と君を殺してしまった罪を、償う場所へ行くんだよ。」

「じゃあ、僕もそこに行く！パパと一緒にがいい！」

浩樹は助けを求めるように父を探したが、その姿はもう、どこにも見ることはできなかった。

「パパ・・・僕のこと、置いて行っちゃったの・・・？」

ポロポロと零れ落ちる涙が頬に幾つもの筋を作り、丸い顎から滴り落ちる。男は浩樹を抱えたまま黙って歩き出した。すると、辺りが急に真っ白な光に包まれ、病室も、廊下も、全てが掻き消された。

「パパ、どこに行っちゃったのかなあ・・・パパ、帰ってくる？いつ帰ってくるんだろう・・・」

男は何も答えない。

「パパ、一人だときっと、寂しいよ。僕、一緒にいてあげないと・・・パパ、僕がお熱出したときね、僕とずっと一緒にいてくれたもん。だから僕、元気になったんだ。だから、今度は僕がパパと一緒にいて、パパを元気にしてあげるんだよ。」

男は尚も答えない。

「パパ、僕のこと、嫌いになっちゃったの・・・？」

それまで黙っていた男が、口を開いた。

「君のお父さんは、君を殺したんだよ。君の首を絞めて、君を殺した。自分勝手な理由で、君の未来を奪い去ったんだ。だから、君とは別のところで反省させるんだ。お父さんは、君を殺した。」

「うん・・・知ってるよ。」

事も無げに答える浩樹に、思わず男の足が止まった。

眠るママ

廊下を早足で歩きながら、看護師は前に行く医師に早口で喋りたてた。

「302号室の患者さんがですね、隣から声がするって、覗いたらしいんですけどね、起きて独り言を話していたって言うんですよ。」

医師は大きく欠伸をし、振り返らずに答えた。

「うむ。やっと意識を取り戻したかな。ひどい事故だったからなあ・・・駄目かと思ったが・・・」

「ええ、意識を取り戻されたのは嬉しいんですけど、何て説明すればいいですかねえ・・・」

医師と看護師は、互いに無言で病室へ急いだ。ドアを開けると、そこにはいつもと変わらずベッドに横たわる患者がいた。近寄って見るが、目を閉じて、静かに寝息を立てている。人工呼吸器から送られる酸素によって上下する胸も、いつもと変わらなかった。

「佐藤さん。佐藤さん。気がついてますか？佐藤さん。」

看護師の呼びかけにも、いつもどおり答えなかった。白衣から取り出したペンライトで患者の目を照らした医師は、軽くため息をついた。

「302の患者って、まだ子供だろ？寝ぼけてたんじゃないのか？意識、戻ってないぞ。」

「本当ですね・・・」

看護師も残念そうにため息をついた。

「もしかしたら、目覚めるのを拒否しているのかもな・・・」

「え？」

「だってな、目が覚めても、もう夫も子供もいないんだぞ？しかも、父親が将来を悲観して無理心中を図ったなんて・・・」

二人は重苦しい空気の中、静かに眠る患者の顔が、少し微笑んでいるように見えることに気が付き、ますます気分が落ち込んだ。

それでも浩樹はパパとママが、大好き

足を止めた男は、腕に抱えた浩樹の顔をじっと見つめた。

「知っているのか？」

「うん。だって、最後に見たの、パパの顔だったもん。」

「それなら・・・」

「息ができなくて苦しかったけど、パパも泣いてたもん。パパも、きっと苦しかったんだよ。パパはずっと、いつでも僕とママに優しくかったもん。僕、大きくなったらね、パパみたいになりたいんだよ。ねえ、じゃあパパは、僕を嫌いになったからどこかに行っちゃったんじゃないんだね？」

「でも、お前はもう大人にはなれないんだぞ。もう、死んでいるのだから。」

浩樹の質問に答えない男の冷たい声も、浩樹には通用しない。

「それでも僕、パパとママ大好き！いつか、また三人で一緒に暮らすんだよ。僕、それまで良い子にしてるんだ。パパとママ、大好きだもん。」

男は無言で再び歩き出した。浩樹は男に抱えられたまま、足をブラブラさせながら真っ白い光に包まれた頭上を見上げながら嬉しそうに呟いた。

「早くパパとママに会いたいなあ。会えたら、何しようかなあ～」

「・・・すぐには無理だが、いつか、その願いは叶うだろう・・・」

「うん！」

浩樹を抱えた男の姿は、真っ白な光の中へと溶けていった。

家族のはなし

<http://p.booklog.jp/book/52810>

著者 : kita-yukiko-0727

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kita-yukiko-0727/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52810>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52810>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ